

## 第5章 宮川流域における弥生社会の展開過程と 大田十二社遺跡の位置

大田十二社遺跡の発掘調査を前後して、この津山盆地においても多数の弥生時代遺跡が発掘調査されている。大田十二社遺跡の位置する宮川流域のものだけでも、押入西遺跡、紫保井遺跡、高橋谷遺跡（一丁田遺跡）、沼E遺跡、沼京免遺跡、沼竹ノ下遺跡（以上集落址<sup>①</sup>）、下道山遺跡<sup>②</sup>、権現山遺跡（以上墓址<sup>③</sup>）等の諸遺跡がある。いずれも工事に先だつ緊急調査ではあるが、弥生社会解明のための多くの手がかりを与えるものである。

ところで、近藤義郎「共同体と単位集団」1959年で展開された共同体論の中核をなすものは、中期後葉の沼弥生住居址群<sup>④</sup>であって、その行動領域<sup>⑤</sup>からみてそれと上記各遺跡とは不可分の関係にある。近藤論文の共同体論展開の「場」を問題とする場合、まさにこれら各遺跡群はその場を共有する。

弥生集落論の新たな展望を切り開くためには、現時点までに蓄積された莫大な資料を駆使し、行動領域に応じた集中的な遺跡群の総括とこれを基とした広範囲の比較分析をおしすすめる必要がある。この点で、これら遺跡群総体としての評価は重要な意味を持つ。

以下、宮川流域の弥生社会の発展過程を通観しつつ、その若干の特質について考察してみたい。

津山盆地の弥生時代前期社会の様相はいまだ明確となっていない。前期の遺跡として、わずかに一丁田遺跡、天神原遺跡、京免遺跡の三ヶ所を数えるにすぎない。いずれも明白な遺構をとどめず、一丁田遺跡が他二者に較べ遺物量が豊富な点注意される以外、その生活痕跡は乏しい。これらの事実から、いずれも小集団の不安定な生活が予想されるが、三遺跡を比較した場合、その遺跡のありかたに一点明白な相異が存在する。一丁田遺跡の場合、集落は中期から後期へと継続して営まれ、これを南限として大規模な遺跡群へと発展してゆくのである。一方、他二者は今のところ中期に直接継続される可能性はきわめて薄い。

津山盆地では、少くとも前期から後期末に至るまで継続して営まれる遺跡は、他に知られておらず、その位置からみても一丁田遺跡は津山盆地に弥生社会が広まってゆく上で母集団または少くともその一つとしての役割を果たした可能性が強い。

津山市内で発見されている確実な弥生遺構の最も古いものに、沼竹ノ下遺跡第1区検出の中期中葉のV字溝がある。このV字溝は、深さ1.5m、幅1.8mで一旦埋ったのち、さらにV字形に掘り込まれていることが観察された。新しく掘り込まれた溝底に大形甕形土器が据えられていた。

検出部長は、区画街路幅7mのみであるが、この地点より約30m南で確認調査により同様の溝が検出されており、さらに長く延びていたことはほぼ確実である。

このV字溝中より、笠原安夫は炭化玄米を植物種子分析の過程で発見しており、土器片の流入が少ないことから、用水溝であったことが考えられる。この溝を集落を取り囲む溝と評価するにしろ、その背景に積極的な開田活動の進展を想像することは容易で、少なくともこの程度の溝を計画的に掘り進めるにたる労働力の結集が可能となったことは認めてよい。

宮川流域で本格的な農業生産が開始されるのはこの時期以降と考えてよいだろう。

一旦流水制御を伴う水田経営が確立された場合、必然的に小規模な集団の分出がくり返されたはずである。津山盆地に多い丘陵上に点在する弥生中・後期の集落のうちには、この時期に開始されるもののあることは興味深い。この例として、紫保井遺跡、沼E遺跡をあげうる。いずれも付近に開田容易な谷をもっている。各遺跡とも住居ないしは、住居址状遺構1～2棟のみ発見されているが、発掘範囲は限定されており、少なくとも数棟で構成されていたことは確かである。このことは、この地方の初期農耕者はまず谷水田の開拓から手がけていったことを示している。その小規模な分出者たちは、中期後葉にいたり遺跡規模を除々に拡大してゆくことが知られており、注目に値することは、後葉に至り爆発的ともいえる遺跡数の増大をみることである。このことは、きわめて限定された地域に多数の人口集中がおこなわれたことを意味している。短期間のうちにこの人口増を招来したのは、全般的な農耕形態の集約化が極度におし進められた結果と考えられよう。

こういった谷水田開拓者たちの住居群址の良好な発掘資料が近年増加してきたので、以下の点について、やや詳しい検討をしたい。

「単位集団」でとらえられるこういった小住居群構造は、通常住居、長方形竪穴住居状遺構、高床倉庫、その他の付属施設と分けて分析するととらえやすい。

通常の居住住居とは、竪穴住居址で、平面形態は円形、隅丸方形が基本である。囲炉裏とみられる中央穴を設置していることが指標で住居規模は大小二形態に大きく分かれる。大形住居を中心に数棟で構成される場合が多い。紫保井遺跡では、大形住居、小形住居各一軒のみサヌカイト片が密に散布するものがあり、通常住居も居住という点では、均質なものではなかったことが推測される。

長方形竪穴住居状遺構は、中央穴が伴わぬことが特徴で、床面に柱穴痕を残さない小形のものや建物状の柱穴配置を示す二形態が確認できている。これは、遺跡のあり方からみて、本来小住居群ごとに、少なくとも一棟伴った可能性が強い。良く焼けた焼土面をもつものが多く、火をたくことを目的に建てられた施設である可能性が強い。

高床倉庫は、通常掘立柱建物址としてあらわれ、柱抜取穴に土器が破碎され投げ入れられているものが多い。偶然の転入でないことは疑いのないところとなっており、倉庫移転に際し祭り<sup>⑫</sup>がおこなわれたとするのがもっとも妥当な考え方で、これには、大形器台や装飾性の著しい壺などがあって、対象となる「カミ」を稲魂とすることができる。

その他付属施設は、前三者以外種類も多いが機能不明のものが多く、ここでは中期後半の小住居群は施設の機能分化が顕著な点だけを強調しておこう。

こういった建物の組み合わせとして、中期後半の小住居群を分析した場合、大まかには奈義町・野田遺跡<sup>⑬</sup>、押入西遺跡、沼遺跡、沼E遺跡、紫保井遺跡、下道山遺跡、久米町・椋山遺跡<sup>⑭</sup>もすべて同一構造の住居群として理解できるもので、こういった群構成をこの地方の中期後半の小住居群のモデルとすることができる。

それでは、こういった小住居群の示す実態はどのようなものであったのだろうか。これらの小住居群には、中葉の草分け的少数住居の拡大としてあらわれているものがあり、住居群居住員相互が血縁関係を基本に結ばれていたことが考えられる。

住居中央穴は、古墳時代にいたりカマドへと変遷するらしい事実から、カマドとしての機能ももちえていた可能性があり、住居個々の共食単位を考えることもできるが、住機能の差を各住居が示すとみられる点、この時期に3mにもみえない住居が特徴的に存在する点から、共食範囲の基本は各住居より大きいとみたい。この時期の火災住居に土器を伴わぬものが多いのは、主としてこの事実にかかわっているのかもしれない。

掘立柱建物の多くが穀倉と考えられるが、小住居群ごとに普遍的に穀倉が伴っていたとみられ、また穀倉と特定住居の間に強い関連もみられないので、これら小住居群がまた財産共有体であったとみられる。

耕地の本源的所有関係は別としても、これら小住居群が耕地の一経営主体であったことに問題はなく、少なくとも用益権を確保していたことは明らかである。

以上の諸点を要約すれば、これら小住居群はその内部構造の細部はおくとしても、独立性のきわめて高い、いわゆる「大家族」に対応させてよいように思われる。沼竹ノ下遺跡や沼E遺跡では中期後葉から後期初頭にかけての小規模な墓地在付設されており、この点からも各小住居群が一「家族」としてのまとまりを持つことが考えられよう。

観点をかえて次に、土器型式の広がりから広くこれら諸集団の社会関係の特質を考えてみよう。美作の中期後半の土器は、各器種にわたってその諸特徴の広がりには斉一的かつ単系文化的でその範囲はさらに広く兵庫県に加古川付近から新見地方まで同系土器の分布をみている。この中でも、美作町・高本遺跡<sup>⑮</sup>、津山市・押入西遺跡、紫保井遺跡、久米町・椋山遺跡の土器を比較すると、その時間的幅にかかわらず類似性が著しく、土器型式の変化は小地域ごとに微妙な差となってあらわれていることに気づく。

この現象は、既述した当時の社会環境をきわめてすなおにあらわしているように思われる。すなわち、発展継承線に沿った交流がその特質であり、同時にこのことは、小地域ごとの閉鎖的社会環境に対応すると考えられるからである。住居群のあり方から考えられた当時の閉鎖社会の特徴は、土器のありかたにもまたよくあらわれているとみることができるのである。

中期の土器様式に比し、後期の土器のあり方には、基本的な変化が観察される。大田1式に編年される大田十二社遺跡9号住居址、15号住居址、PE7袋状貯蔵穴出土の土器と沼E遺跡1号住居址出土の土器を比較すると、たとえ両者の間にわずかな時期差を認めたとしても、それぞれの土器が示す様相には、著しい相異を認めることができる。特にそれは壺形土器によくあらわれている。沼E遺跡の長頸壺形土器は県南部地方の上東式土器のそれと酷似しており、逆に大田十二社遺跡の壺形土器には、上東式土器の影響がほとんど反映していない。近接した遺跡において、その土器のあり方にかなりな相異が生じていると考えざるをえない。両者は、1kmのへだたりもない一つの谷をはさんだ二遺跡であり、一方では同一共同体のサブユニットとみてまちがいないのである。このことは、こういった社会関係の変化を反映しているのだろうか。少くとも閉鎖環境の崩壊と同一共同体内のサブユニット間に、なんらかの差が芽ばえたことがよみとれる。

中期の遺跡と後期の遺跡を、宮川流域の遺跡群の中で比較した場合最大の相異点は、平地部に大規模な環濠集落が形成されてくることである。大規模というのは、単に集落面積の問題ではなく、同時併存住居数の差となつてあらわれている。大田十二社遺跡と沼京免遺跡の後期集落を比較した場合、どうみても集落面積では倍以上のひらきはない。しかし、大田十二社遺跡の場合一時期の住居は非常にまばらで、沼京免の場合は非常に多い。土器形式からみていずれの集落も後期に途切れることなく存続しており、この点における差異はない。同時存在住居数を大胆に推定してみた場合、大田十二社遺跡がせいぜい一時期4～5軒であったとみられるが、沼京免遺跡の場合は最盛期20軒を優に越していたものとみられる。

ところで、沼京免遺跡は中期中葉から引きつづき営まれた集落でもあるので、本来拠点集落であったとする見方もできるが、中期住居群が数ヶ所に点在するように観察され、後期集落を取り囲む2～3m幅の環濠が掘られた時期は後期以前に溯る可能性はなく、中期住居群が後期環濠外に多い事実は、大まかには中・後期の間に集落の性格に大きな相異があったことを推測させる。

後期のもう一つの重要な特徴は、大田2期以降宮川流域の土器の中に山陰的色彩が濃厚に出現してくることである。第4章1でふれたように大田十二社遺跡出土土器には、各時期にわたって山陰地方の土器様式の直接的な影響が認められ、その中には単に影響というだけではなく、伯耆、但馬地方からの搬入品も認められるのであって、宮川流域と日本海側の地方との緊密な交通関係を知ることが出来る。

中期末に谷水田における集約農業が一定の到達点に達したことは、集落数の増大とともにきわめて限定された立地を示す集落が後期に継続されず居を移動するように観察されることから推測され、後期にいたり農耕地の新たな拡大が図られたことを推測させるが、後期における土器のあり方は、この中で蓄積された余剰生産物を背景に広範囲な交易圏が形成されてきたこ

とを示しており、土器の出自からみて交易圏は山陰地方を広く含むものであったことが推定できる。こういった広範囲な交易圏を設定するものとして、特定集団の果たした役割は大きかったであろう。

また、可耕地が限定されつつあった状況にあって土地獲得をめぐる葛藤が一層増大してきたことであろう。こうした中で、社会分化が急速におしすすめられたとしても不思議はなく、それが階層と呼ぶにはなお未熟なものであったとしても、農業共同体内部に優劣の分化が目だったことは容易に推測される。

ところで、経済圏の設定のみによって宮川流域の土器に出現してくる著しい山陰的色彩を説明しきることはできない。こういった経済圏は、民族例によるかぎりしばしば通婚圏とも重なるものであって、血縁婚姻によるつながりの強い地域でもある。後期土器のあり方は、多様な出自土器の錯綜として全搬として日本海色が強いわけであるが、このことからおして、遠融地との通婚志向ないしは傾向が生れつつあったことを指摘することができよう。

墓地遺跡において葬送用土器が増大するのまさにも大田2期以降のことであり、両者はきわめて関連深い内容をもっているとみられる。

墓地における葬送用土器の盛行は、とりもなおさず墓前祭祀の活発化を示しており、祖霊のしめる位置が日常生活をも律する傾向の現われてきたことを知ることができる。内行花文鏡片を出土した下道山遺跡の位置からみても、この前後の時期から階層化の動きが顕著になってきたことを知ることができるが、それはまた出自を問題とした地域間交渉の結果でもあったことを知らねばならない。

葬送用土器についても、全般として日常土器に準じた傾向を示すが、この中で下道山遺跡、上原遺跡等では県南部地方で著しい発達をみた特殊器台形土器がこれら木棺墓群に伴って発見されている。

これら特殊器台形土器は、いずれも平墓木棺墓群の特定の墓ないしは墓群にともなって出土するものとみられ、直接首長権継承儀礼に用いられたとすることは困難であるが、少なくともこの特殊器台形土器のあり方から、この墓群中で県南部地方の特定の葬送祭式が直接ないしは間接とりおこなわれたことを推測してもよいだろう。この異質な祭式は、農業共同体内外に一定の継承線を強調誇示する働きは十分果しえたことであろう。

こういった背反した傾向の中に美作における階層形成の特質を垣間みることができよう。

いずれの地域をみた場合も、階層形成の動きは主として不均等の拡大に対応した首長権の安定化、世襲化を図るという内部要因に基づくものとみられ、各地域の存在条件に規制され地域間にかなりな変異を生じ、それが墓制におけるさまざまな特異性となってあらわれているとみられるが平墓木棺墓群に特殊器台形土器が伴うという宮川流域の事例もまたそのことを示していると考えることができよう。

この地方の集落の消長からみると、集落遺跡で大田 5 期以降古墳時代に継続して営まれるものは、きわめて多数の発掘例があるにもかかわらず、今のところ知られていない。現象的には大田 5 期に至り突然集落は消失するような観を呈している。今後古墳時代前期集落のあり方をはっきりさせなければならないが、少なくともこの事実から弥生時代と古墳時代の間に社会構成史上の画期があったことを推測することは可能である。

以上、大田十二社遺跡の報告書の作成にあたり、宮川流域における弥生社会の動向について若干の見通しを述べたものであるが、津山市における弥生時代遺跡の発掘調査例は多数あり、そのほとんどが未整理であって、本稿はきわめて大雑把な見通しにすぎず、現状では不十分な点が多く今後補正を期してゆきたい。(河本清、中山俊紀)

本稿は、1979年 7 月の考古学研究会、岡山例会で「宮川流域における弥生社会の展開過程」として発表したものに若干の加筆修正を加えたものである。本稿の作成にあたっては、近藤義郎、中根千枝両先生の学恩に負うところが大きい。また、安川豊史、行田裕美の教示を得た他、近藤義郎先生に御校閲いただいた。記して感謝の意を表したい。

(注)

- ① 橋本惣司、下沢公明、井上弘、柳瀬昭彦「押入西遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 3』岡山県教育委員会 1973年
- ② 津山市紫保井に所在する弥生時代中・後期集落遺跡、1976年大規模農道敷設に伴い紫保井遺跡発掘調査委員会が発掘調査。報告書未刊
- ③ 津山市山北に所在する弥生時代から鎌倉時代にいたる遺跡、津山市立鶴山中学校の建設に伴い、1977年～78年にかけて津山市教育委員会が発掘調査。報告書未刊
- ④ 河本清、柳瀬昭彦「津山市沼 E 遺跡 I」津山市沼 E 遺跡発掘調査委員会、(近刊)
- ⑤ 津山市沼に所在する弥生時代中・後期の集落遺跡、土地区画整理事業に伴い1977年～1979年にかけて津山市教育委員会が調査。報告書作成中。
- ⑥ 津山市沼に所在する弥生時代中・後期の集落遺跡、土地区画整理事業に伴い1979年～80年に津山市教育委員会が調査。報告書作成中。
- ⑦ 御船恭平、「美作における弥生時代の墳墓について」『古代学研究 21・22合併号』1959年 栗野克己、岡本寛久、「下道山遺跡緊急発掘調査概報」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 17』1977年
- ⑧ 津山市小原所在の弥生時代後期墓地遺跡、1977年墓地造成工事に伴い津山市教育委員会が調査。報告書未刊。
- ⑨ 近藤義郎「共同体と単位集団」『考古学研究 第 6 巻第 1 号』1959年
- ⑩ 近藤義郎、渋谷泰彦、「津山弥生住居址群の研究」津山市 津山郷土館 1957年
- ⑪ 河本清、橋本惣司、下沢公明、柳瀬昭彦「天神原遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 7』岡山県教育委員会 1957年
- ⑫ 押入西遺跡、紫保井遺跡、鮎込遺跡等で同様の現象が確認された。
- ⑬ 浅野正、高村継夫、西山薫『北吉野村史』北吉野村史編纂会 1956年

- ⑭ 村上幸雄、橋本惣司、『榎山遺跡群Ⅰ』久米開発事業に伴う文化財調査委員会、1979年
- ⑮ 青木遺跡発掘調査団編『青木遺跡発掘調査報告書Ⅰ』青木遺跡発掘調査団 1976年
- ⑯ 山磨康平、井上弘、岡田博「高木遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告8』1975年